

## 序文

日本造血細胞移植学会データーセンターをはじめ、関係各位のご尽力により、日本造血細胞移植学会の全国調査報告を今年度もお届けすることができました。

昨年度から、造血細胞移植全国調査の一元化が実現されたことで、これまでに以上に、登録率の向上や正確な情報の収集が可能になりました。現在、データの有効利用を目指し、一元管理委員会から疾患毎のワーキンググループのメンバーが募集されています。わが国から、これまでも増して、貴重な情報が世界に向けて発信されるのを楽しみにしております。

さて、巻頭の移植種類別、あるいは登録病院別の年次推移をたどることで、わが国の移植医療がこの10年間で大きく変貌したことがわかります。小児の移植症例数は、年々減少傾向ですが、成人は移植年齢の上限があがったことにより、大きく症例数が増えています。90年代初頭には、小児と成人の移植症例数の比は1:1.5であったのが、最近では1:6にまでその差が開いています。また、症例数の多い施設が増えたのも最近の傾向です。10年前には、年間30例以上の移植を経験する施設はほとんどみられませんでした。今回は、20を超える施設がこの基準に達しています。そのうち、小児の移植施設は1施設のみです。しかし、海外からみれば、わが国の規模で300に達する移植施設が存在するのは、驚くべきことでしょう。ちなみに、中国の移植施設は15施設、韓国は40施設です。韓国では主な移植センターはソウルに集中しているようです。先日、ソウルのS移植センターの小児科教授と話す機会がありましたが、昨年の移植例数は、小児のみで133例とのことでした。わが国の小児に対する年間移植症例数が450例前後であることを考慮すると、1施設でわが国の30%ちかくの症例数を移植していることになります。日本がアジア諸国に、造血細胞移植に関して、先輩面ができなくなったことだけは確かなようです。その意味でも、Asia-Pacific Blood and Marrow Transplantation Groupとしての近隣諸国との協力関係が今後ますます重要になってくると思われまます。医療のみならず、様々な分野で、わが国の現状はガラパゴス化と揶揄されていますが、造血細胞移植医療については、ぜひその轍を踏んではならないと考えています。

2010年4月

## 序文

日本造血細胞移植学会平成 21 年度全国調査報告書が完成致しましたのでお届け致します。本報告書の作成に当たり、名古屋大学造血細胞移植情報管理・生物統計学講座の諸先生、日本造血細胞移植学会データセンターと小児血液学会登録事務局のスタッフの方々、骨髄移植推進財団移植調整部および日本さい帯血バンクネットワークのご努力に、そして何よりも移植施設の方々の努力と熱意に感謝と敬意を表します。

報告書を見て参りますと、移植登録総数は緩やかなペースではあるが、増加の一途をたどっていることが分かります。各種疾患毎の移植数の推移や移植法別の数など、我が国における造血細胞移植の臨床統計は、我々が日常診療の際に移植適応を考える上でも大変参考になるばかりでなく、これからの **prospective study** の礎ともなるものです。平成 22 年度より、この移植登録データを有効に利用すべくワーキンググループが稼働いたします。どうぞ、奮ってデータ利用していただけますようお願いいたします。

我が国での疾患登録がなかなかうまくいっていない中で、造血細胞移植に関しましては全国レベルで毎年定期的にまとめ、だれでも必要に応じてそれを参照し、臨床にあるいは研究に利用出来るようになったことの意義は誠に大きいと言えます。この資料が多くの方の移植関係者の診療の一助となり、我が国のさらなる造血細胞移植医療の発展に活用されるよう願って前書といたします。

2010 年 4 月

日本造血細胞移植学会データ管理委員長  
坂巻 壽